

国立国語研究所学術情報リポジトリ

発話分析の観点：多角的な特徴記述のために

著者	中田 智子
雑誌名	研究報告集
巻	12
ページ	279-306
発行年	1991-03
シリーズ	国立国語研究所報告；103
URL	http://doi.org/10.15084/00001342

発話分析の観点

— 多角的な特徴記述のために —

中田 智子

NAKADA Tomoko : Viewpoints for the Analysis of Utterances in
Discourse : A Multi-sided Characterization

要旨：談話の構造を考察する際の分析の単位や方法は、研究の目的によって様々な選択の可能性があるであろう。ここでは、談話を発話機能のやりとり、あるいは連なりとしてとらえる。そして、move を分析の単位としながら個々の発話のはたらきや特徴を検討し、それを通して談話の姿を記述することを目指す。そのために、まず発話行為を表わす、または発話行為に関係する日本語の動詞・連語を分析し、発話を多角的に考察する際の観点を蓄積する。次に、それらの観点をもとに、①発話の誘発要因、②話し手・聞き手および両者の関係、③はたらきかけの仕方、④述べられる命題の種類、⑤談話の他の発話との関わり方、⑥その他、という基本的な軸に沿った分類項目リストを作成し、発話の特徴づけ作業の一つの手段として提案する。

キーワード：談話分析，機能，発話の分類，発話行為，特徴記述

Abstract : A variety of methods and units of analysis are possible for the description of discourse structures, depending on the specific objectives of the study. In the present study, I regard discourse as an exchange or sequence of speech functions and adopt "move" as the unit of analysis. The goal of this study is to describe discourse features through the identification of speech functions and characteristics of the utterance units (moves), which compose the discourse.

For this purpose, I analyzed Japanese verbs and phrases which denote speech acts in order to provide viewpoints for a multi-sided investigation of utterance units. Based on these viewpoints, I propose a list of classifying features organized under the following six categories : (1) the impetus for the utterance, (2) characteristics of speaker, hearer and their relationship, (3) the type of illocutionary act, (4) the proposition type, (5) the relationship of the utterance to other utterances in the discourse, and (6) others.

Key words : discourse analysis, function, classification of utterances, speech act, description of characteristics

1. はじめに

ひとまとまりの談話を分析するには、様々な方法が考えられる。全体を俯瞰的に見渡して開始、展開、収束といった大きな構成をつかむこともあれば、文章の段落ごとの内容や、段落間の関係を見ることもある。中に現れる指示詞や接続表現など、特定の言語形式に着目して、文と文とのつながりを明らかにする場合もある。それらの方法は、具体的なアプローチの仕方は異なるが、その多くが談話を構造体としてとらえ、談話の構成要素となる何らかの単位を設定して分析を行う、という基本的な姿勢では共通しているといえるであろう。ただ、談話のどのような側面に重点を置くかで、何を単位として、どういった分析を行うかが分かれてくるのである。

筆者は、談話（ここでは特に複数の参加者による会話を考える）をことばによるはたらきかけのやりとり、すなわち質問や要求、伝達、あるいはそれに対する応答といった機能のやりとりとしてとらえる立場をとり、はたらきという視点に立った分析の単位として *move* を採用することを提案した（中田 1990）（注1）。*move* は機能を担う最小の単位と定義される。ごく単純な例を挙げれば、「今、何時?」「5時だよ」というやりとりは、各々が一つの *move* にあたり、前者は質問（情報要求）、後者は答え（情報提供）という機能を担っている。*move* を単位として個々の発話の機能や特徴を記述することは、談話を発話に含まれる諸特徴の連なりとして描くことである。そして、その中における特徴の現れ方のパターン、およびそのバリエーションを観察することによって、談話の姿をより精密に記述することができる。また、他言語の談話資料を同様の方法で分析して比較対照すれば、これまで漠然と「言語間におけるコミュニケーションの方策の違い」などと言われてきたものが、実際にはどのような内容を持ち、どこが異なるのかを具体的に示すこともできるはずである。

ただし、分析の対象となる個々の発話は、様々な面を持つ複合的な存在である。たとえば Hymes (1972) は、メッセージの形式・内容、場面、送り手、受け手、調子、チャンネルなど、発話の構成要素として16の項目を挙げ

ている。先の例においても、ただ＜質問＞＜答え＞といった大まかなカテゴリーに入れるだけで片づけるのでは、特徴づけとしては不十分であろう。発話のありようを的確に観察し分析するには、機能だけでなく、その他諸々の要素をも考慮に入れた多角的な視点を用意する必要がある。本稿では、まず、こうした発話の多面性を念頭に置きながら、発話を取りまく諸要因から分析の観点を抽出し、蓄積する。そして、それらの観点に基づいて、発話の特徴を記述するための分類項目リストを提案する。

2. 発話行為の分類に関する先行研究

発話の機能、あるいは発話によってなされる行為の種類分けについては、既に幾つもの考察・研究がある。

国語研(1960)は、「言語主体が文全体にこめるところの、いわゆる命令・質問・叙述・応答などの内容」として、表現意図の分類を行なった。実際の話しことば資料に基づいたこの種の研究としては、先駆的なものといえる。ただし、ここでは表現意図、構文の型、イントネーションの型の総合として文型をとらえようとしたため、発話の実現形である文型（とくに文末形）を多分に意識した分類になっている。

国語研(1960)の分類をもとに、さらに他の要素をも含めた考察として、野元(1987)における発話機能による分類がある。複数の視点から発話機能の特徴づける試みであったが、分析対象が初級用の日本語教育映画のシナリオであり、日本語教育における発話機能の説明という特別な目的を持っていたため、枠組みとしてはかなり単純化されたものであった。

発話による行為そのものの種類分けには、海外の研究が多い。まず、Austin(1962)による「判定宣告型(Verdictives)」「権限行使型(Exercitives)」「行為拘束型(Commissives)」「態度表明型(Behavitives)」「言明解説型(Expositives)」の五分類がある。抽象的な大分類であるが、基本的な概念を整理する役割を果たしている。

Searle(1976)は、行為の目的、ことばと外界状況との適合の仕方、表出さ

れる心理状態など、12の視点から発語内行為 (illocutionary act) の特徴づけを行ない、特徴の組み合わせに基づく「陳述表示型 (Representatives)」「行為指導型 (Directives)」「行為拘束型 (Commissives)」「態度表明型 (Expressives)」「宣告命名型 (Declarations)」(訳語は山梨1986による) の分類を提案した。様々な角度から発語内行為の性格を記述しようというアプローチがなされている。

Wierzbicka (1985, 1987) は、発話行為の分類にあたって英語の発話行為動詞をとりあげ、その意味的な構成要素を明らかにしようとした。その際、ある語を他の類義語で置き換えるような循環性を避けるため、I, you, want, know などのごく基本的な語だけを用いて定義を与えている。数多くの動詞を実際に定義してみせている上、少数の基本語をメタ言語とする試みも評価される。しかしながら、類似の意味を持つ動詞を比較して微妙なニュアンスの違いを探るには、説明文的な定義は繁雑に過ぎる感があり、限られた語彙の範囲での記述にももどかしさを禁じ得ない。また、発話のはたらしめの中には一つの動詞だけでは言い表わせないものもあるなどの理由から、発話行為と発話行為動詞の混同の危険性もしばしば指摘されている。

3. 分類枠の作成作業

3. 1. 分類枠の目的と形式

前節で概観したもののうち、特に海外の先行研究は具体的な発話より抽象的なレベルを扱っており、行為としての典型的な性格を述べるのが目的となっていた。本稿では、実際の談話に現れる発話の分析を目標として、その出発点となる特徴分類枠を作成する。

分類枠の形式は、野元 (1987) の「発話機能の部」(担当：中道真木男) における「場面を形成する要因による分類」の部分を参考にした。この分類は、発話の動機、働きかけの種類、発話内容に対する態度 (評価) という3つの分析項目について、考えられるバリエーションを選択肢として備えたりストの形をとっていた。そして、分析する発話についてあてはまる選択肢を

チェックし、選ばれた選択肢の組み合わせによってその発話の特徴づけを行なうものであった。発話の特徴を数多くの観点から検討したり、分析項目間の関係を整理したりする上で適当と考えられるので、その方式をここでも採用する。

3. 2. 分類項目の収集

分類枠に入れる項目、そしてその下に揃えるべき選択肢を収集する作業としては、発話行為を表わす、または発話行為に関係する日本語の動詞・連語を分析した。ただし、語そのものの意味記述や分類は目的とせず、各々が表わす行為・はたらきの特徴を記述する上で有効となりそうな観点、およびそれらの観点到照した特徴のバリエーションを収集するための材料に用いた。従って、分析する動詞類も発話行為を表わすものを網羅的に揃えるというより、以下に述べる分析の目安に関して何らかの特徴を示すようなものを重点的に見た。たとえば「言う」「話す」などは行為としての特徴の色合いが非常に薄いので、考察に含まなかった。逆に「探りを入れる」「おだてる」など、直接的な発話より抽象度の高い行為を表わしていても、対象としたものもある。

動詞・連語は、『学研国語大辞典（第二版）』『角川類語新辞典』『分類語彙表』の見出し項目から収集し、適宜関連項目も補って、計181語を考察した（注2）。

分析で主な目安としたのは、以下の六つの点である。

- ①誘発要因
- ②話し手・聞き手、および両者の関係
- ③はたらきかけの仕方
- ④述べられる命題の種類
- ⑤談話の他の発話との関わり方
- ⑥その他、発話の「場」を形成する要因

①は、そのはたらきをなさしめることになったきっかけに関すること、ことばをかえれば、何をふまえて、何に基づいているかを見る。

②は、話し手と聞き手の立場、および両者の関係を、どのように反映し、表示しているかという点である。

③は、発話の機能を問う上で、中心的な部分となる。Searle (1969, 1976) は、発話行為に含まれる「命題 (proposition)」とそれを提示する「発語内的な力 (illocutionary force)」とを区別したが、③は後者についての吟味である。「命題」と「発語内的な力」の区別について、少し述べよう。たとえば、「あなたは行儀がいい」という命題があったとすると、それに命令、質問などの発語内的な力が加えられて、「行儀ヨクシナサイ」「アナタハ行儀ガイイデスカ」などの発話として具現する。命題のみで発話となることはないものであって、仮に形としては命題と同じ「地球ハ丸イ」であっても、発話（行為）として現れた場合には陳述なり主張なりの発語内的な力がはたらいているのである。

④は、もう一つの要素である命題の特徴を考察する。ただし、必ずしもすべての発話が命題を含んでいるとは限らない。たとえば、人の注意を引こうとする「ネエ」や、慣用的な挨拶ことばなどは、発話としてはたらきをなすが、命題は含んでいない。

⑤は、談話において他の発話（具体的には直前、あるいはそれより前の発話）とどのような関係にあるはたらきなのか、または談話の展開・構成の仕方に寄与するかどうか、といったことを見るもので、話の流れにおけるあり方に重点を置いている。

⑥には、そのはたらきを担う発話がなされる「場」、すなわち場面・状況を形成する要因のうち、①～⑤でとりあげた以外のものが入る。

これら六つの軸に沿って、分析対象とした動詞・連語の表わすはたらきを考察した。たとえば、「命令する」によって表わされるはたらきの特徴は、話し手が聞き手より力関係において上位にあること、機能が行為の要求であること、含まれる命題が典型的に聞き手の未来の行為を述べること、などであると考えられる。そしてそれらのことから、②の話し手・聞き手の関係については力関係という観点が、③のはたらきかけの仕方については行為要求と

いう機能の一つの種類が得られる。④の命題に関しては、主語あるいは主題、および命題の過去／未来志向性などといった観点がでてくる。このようにして様々なはたらきを吟味しながら、得られたポイントを蓄積し、整理した。

もっとも、動詞・連語を資料とすることで必然的な限界が課されるのは事実である。それらが表わす発話行為は、具体的な発話に比べると抽象化されており、得られる情報も限られてしまう。特に、発話をとりまく具体的な場面・状況に関する要因は、ほとんど拾えないことになる。しかし、一方では現実的な利点もある。分類の枠組みすら持たない出発点の段階では、いきなり生の資料にあたるよりも、動詞・連語のレベルをまず検討する方が、各種の面におけるはたらきのバリエーションを豊富にそろえる上で、そして体系的な視点を得る上で、はるかに効率がよい。そこで、今回はまず基本的な分類の枠組みを作成し、資料から得られる情報でできるだけ分類項目を整えることを目指した。

3. 3. 動詞・連語の検討から得られた観点の整理

上述の考察を行なった結果、得られた観点を以下にまとめる。なお、例としてあげる<反論する><問い返す>などは、語義を議論するのではなく、それらが表わすところのはたらきを指すという意味で、< >を付して示す。

①誘発要因

○先行する別の発話をふまえたものかどうか

<反論する><問い返す><相づちをうつ>などは、まず相手の発話があってはじめて成り立つ。<つけ加える><訂正する>なども何らかの発言や命題の存在が前提となる。また、<(横から)口をはさむ>の場合は、先行する発話が話し手に直接向けられたものではない、という条件が付く。

○先行する何らかの行為をふまえたものかどうか

<謝る><感謝する>のように、対象とすべき行為の存在を前提とするものがある。また、<断る><承諾する>も、申し出、誘い、頼みのよ

うな行為（先行する発話として実現される場合もある）の存在を前提とする。

○話題あるいは誘発要因と話し手・聞き手の利害との関係

述べられる内容、あるいはその発話がなされるきっかけとなったことが話し手または聞き手にとってよいことか悪いことか、の区別。＜祝福する＞＜お悔やみを言う＞＜感謝する＞＜謝る＞などの挨拶に典型的に現れる。

②話し手・聞き手、および両者の関係

○話し手の立場・種類

何かを伝えるはたらきでも、＜述べる＞（自身の発話）、＜伝言を伝える＞（仲介者）、＜代弁する＞（真の話し手ではないが、単なる仲介者でもない）では、それぞれ話し手の立場が異なっている。

○聞き手の立場・種類

普通は対面している相手を聞き手とすることが多いが、自分自身に語りかける＜自問する＞などもあれば、同席者の耳に入ることを承知の上で独り言を言ってみせる場合もある。また、明示的に伝言を頼む＜ことづける＞とも少し異なり、一応目の前にいる相手に向かって言っているのだが、その人を通して第三者（話し手が意図する本来の相手）に伝わることが期待される場合（「先日ハ、奥様ニイロイロオ世話ニナッテ、本当ニアリガトウゴザイマシタ」）など、聞き手のとり方にも様々な種類があり得る。

○話し手と聞き手の力関係

＜命令する＞＜指示する＞＜依頼する＞＜哀願する＞などは、相手に何らかの行為を要求する点は共通でも、話し手と聞き手の力関係によって機能が区別され得る。ここで言う力関係とは、南（1987a）で述べられた八種（身分的、生得的、経歴的、役割的、差別的、能力的、立場的、絶対的）の上下関係を含むものとする。

○話し手と聞き手の親疎関係

<冗談を言う><ねだる>などは、ある程度親しい間柄の相手に対して、<遠慮する>は、逆にある程度距離をおくべき相手に対してなされる。また、これらのはたらきを持つ発話をするすることで、相手との関係を規定したり表明したりする場合もある。親疎の種類には、南（1987a）の心理的（親しいかどうか）・社会的（ウチ・ヨソの区別など）の両方を含む。

③はたらきかけの仕方

○行為としてのはたらき

人にもものを頼む、挨拶をするなどのはたらき、発話行為の種類である。要求的（質問をしたり頼みごとをするなど、情報や行為などを相手に求める）はたらきと、非要求的（相手に求めるのではなく、自分の方から何かを述べる、または挨拶するなどしていく）はたらきに大別することができる。

○はたらきかけの意図・姿勢

相手へのはたらきかけの意図あるいは姿勢として、操作しようとする（<指示する><説得する>）、教示する（<説明する>）、共感を示す（<共鳴する><お悔やみを言う>）、攻撃する（<非難する>）、感情を調整する（<なだめる>）、などの種類がある。

○話題・内容に対する話し手の確信

発話内容の提示態度に関する点である。同じ内容を表明するにも、話し手がどれだけ強い確信を持っているかで、<断言><推量><あてずっぽう>などの違いが出てくる。相手に情報を求める場合でも、内容に対する確信の度合いによって、純粋な<質問>から<確認要求><同意要求>までのバリエーションが現れる。

○話題・内容に対する話し手の評価

述べる内容に対して、話し手が肯定的な評価を込めるか否定的な評価を込めるか、あるいは中立的かで、発話としての性格が異なってくる。たとえば、第三者のことについて述べる場合は、<ほめる><悪口を言う>

<非難する>などの区別が、この点に関わってくる。

○はたらきかけの調子

あわれっぽく、激しく、断固として、事務的に、感情的に、いばって、必死に、こっそりと、いやいや、などの行為の調子。

○明示性

<示唆する><探りを入れる><皮肉を言う>など、元来ははたらきかけの仕方が非明示的であるところに特徴があるものがある。また、はたらきかけ自体の性質は特に非明示的でなくても、婉曲話法や言いさしなどを使うことによって、発話として具現する段階で非明示的になる場合もある。

○目的重視型かどうか

何を言うかより、その発話によって達成しようとするものが一義的となる場合もある。この種のはたらきとしては、<なだめる><慰める><励ます><おあいそを言う>など、感情面の調整をするものが多い。

○制度的な後ろだての必要の有無

<破門する><任命する>などは、特定の立場にある人物が特定の状況下でなさない限り、効力を発揮しない（行なわれたことにならない）。そのように、発話による行為の遂行にあたって制度的な権限、きまりなどを必要とするという性質を持つはたらきかけもある。

○有効要素か無効要素か

種類は少ないであろうが、<言いまちがえる><言いよどむ>など、極端な場合には実際の談話の進行の上では建設的な役割を果たさない、たとえば意味不明に近い、無効といえるような発話を作り出すはたらきもある。

④述べられる命題の種類

○命題（発話によって提示される内容）が客観的事実か主観的態度か

<伝達する><報告する>のように客観的な事実内容を伝えることもあれば、自身の感情や意志を述べたり、相手の気持を尋ねたりする場合も

ある。

○命題が誰の側についてのことか

たとえば何かよいことについて肯定的評価や好意をまじえながら述べる場合、それが話し手側のことか、聞き手あるいは第三者の側のことかによって、＜自慢する＞＜祝福する＞＜ほめる＞などの区別が出てくる。

○命題の過去／未来志向性

特徴的に命題が過去を志向するもの（＜述懐する＞＜弁解する＞など）と、未来を志向するもの（＜依頼する＞＜約束する＞など）がある。特に、話し手の未来の行為について述べる＜約束する＞のようなものは、自身の行為を拘束する性格を持つ。

⑤談話の他の発話との関わり方

○同調性

話の流れにおいて、相手の意向や発言の趣旨に同調する（＜賛成する＞＜承諾する＞）か、同調しない（＜反対する＞＜断る＞）かの区別である。

○発話のうけつぎの仕方

＜相づちをうつ＞＜（呼ばれて）返事をする＞などは、相手の発話を受けてやるはたらきを持っている。一方、＜話をそらす＞＜黙殺する＞のように、きちんと受けない場合もある。

○メタ言語性

「話ハ違イマスガ」など、談話の展開の仕方を述べるもの、「チョットゴ相談シタインデスガ…」のように自分が発話によってする（した）行為をことばで表わすもの、あるいは＜問い返す＞＜復唱する＞など、先行する発話そのものに言及する類を、それ以外のものと区別する。メタ言語表現の分類と記述、および例は、杉戸（1983, 1989）に詳しい。

○談話構成上のはたらき

メタ言語性のように明示的な言及がなされなくても、＜きりあげる＞＜しめくくる＞はたらきをする発話（「ワカリマシタ」「ジャア、ドウモア

リガトウゴザイマシタ」) など、談話の進行・構成に寄与するものがある。

○単独ではたらきをなすか、プロセスの一部か

単独の発話だけで成立するはたらきもあれば、＜説得する＞＜相談する＞のように、ある程度の長さのまとまりによってなされることが多いものの、＜言いはる＞などのように持続性を前提とするものもある。

⑥その他、発話の「場」を形成する要因

○場面の性格

＜発表する＞＜演説する＞＜ぐちを言う＞など、場面や状況の種類（公的／私的、あらたまり／くだけなど）との結びつきが深いものがある。

○談話のジャンル

＜証言する＞＜供述する＞などに見られるように、特定のジャンルの談話にのみ現れるはたらきがある。

4. 分類項目リスト

前節では、動詞・連語によって表わされる行為、すなわちある程度の抽象性を持ったレベルでの分析から得られた観点を挙げた。それらをもとに、実際の発話の分析に適用することを念頭において作成したのが、以下の分類項目リストである。【発話の「場」を構成する要因】の項目は、Hymes (1972)、杉戸 (1983) を参考に、試行的に補充した。各項目の下にある選択肢は、動詞・連語の分析で収集されたバリエーションを整理したものである。

これらの項目に沿って、分析対象とする発話 (move) に適合する選択肢をチェックしていくと、選ばれた選択肢の組み合わせによってその発話の特徴記述を行うことができる。また、特定の項目に関して、談話を構成する個々の発話を通して見ることで、談話における相互作用の流れを観察することもできるはずである。

S：発話者，H：Sの発話の受け手，O：それ以外の人物

【発話の誘因】

<1>発話のきっかけ

1. 自律的（特定の文脈をふまえず，Sが自発的に発話）
2. 進行中の話の流れにおける自発的な発話
3. 事態の推移（できごと，事物など）
4. Hの動作・行為
5. Oの動作・行為
6. S自身の動作・行為
7. Sに直接向けられたHのことば
8. Sに直接向けられたのでないHのことば
9. Sに直接向けられたOのことば
10. Sに直接向けられたのでないOのことば
11. S自身の発話

→<2>

（注3）

→<18>

0.

<1>→

<2>発話を誘発したこととS，Hの利害との関係

1. Sにとってよいこと
 2. Hにとってよいこと
 3. SとHにとってよいこと
 4. Sにとってわるいこと
 5. Hにとってわるいこと
 6. SとHにとってわるいこと
- 0.

【話し手，聞き手，および両者の関係】

<3>Sの立場

1. もともとの話し手（自身の発言としての発話）
2. 見かけの話し手（代弁者，代表者などの場合。第三者の声音・口調を真似たような直接話法の伝聞も，これに含める）

3. 仲介的話し手 (伝言を伝えるなど仲介者の立場をとっている場合)

0.

< 4 > Hの立場

1. マトモの聞き手 (その発話が直接向けられた人物)

2. ワキの聞き手 (発話が直接向けられていない会話の参加者,
「聞かせ」の対象)

3. 潜在的な聞き手 (会話に参加していないが、その場において発話
を耳にする人物)

4. 代理の聞き手 (この聞き手を通して、Sの意図する本当の
相手に伝わる事が期待されている)

5. 超越的な聞き手 (一同声をそろえて言う「イタダキマス」、読経の
ような場合)

6. 「無」の聞き手 (「オット」「アイタッ」などの反射的な表出)

7. S自身 (独語)

0.

< 5 >

→ < 6 >

< 7 >

< 8 >

< 5 > SとHの力関係の顕在化

1. SはHより上

2. SとHは同等、あるいはSがHより上

3. SとHは同等

4. SとHは同等、あるいはSがHより下

5. SはHより下

0.

< 6 > SとHの力関係への影響

1. Sを上にする／Hを下にする

2. Hを上にする／Sを下にする

0.

< 7 > SとHの親疎関係の顕在化

< 4 > →

1. 親（親しさを示す）
2. 疎（遠ざける，距離をおく）
- 0.

< 8 > SとHの親疎関係への影響

1. より親にする
2. より疎にする
- 0.

【はたらきかけの仕方】

< 9 >有効性

1. 有効→ < 1 0 > < 1 1 > < 1 2 > < 1 3 > < 1 4 >
2. 無効
(発話としてのはたらきが不明なほど不完全な言いよどみ, 言いさしなど)
- 0.

< 1 0 > 行為的機能

1. 情報要求（未完成な命題の欠落部分を補う，あるいは
提示された命題の真偽を述べるよう，Hに求める）
2. 行為要求（命題に述べられる行為をするようHに求める）
3. 注目要求（S，あるいはSが指示するものに対するH
の注意を喚起する）
4. 陳述・表出（何らかの命題を述べる）
5. 注目表示（何らかの存在，はたらきかけを認識したこ
とを示す）
6. 関係づくり，儀礼（談話の参加者間の関係調整，挨拶な
ど）
7. 宣言（命題を述べることによって事態を変化させたり決
定したりする）
- 0.

< 9 > →

< 1 1 > Hへのはたらきかけの姿勢

1. 操作的（行動を誘発するなど、相手を動かそうとする）
2. 教示・伝達の（教える、伝える態度）
3. 非教示的（情報を明確に出さない、伝えないことを目的とする）
4. 教示要求的（相手に教示を求める）
5. 自己拘束的（約束、申し出など、自身の未来の行動を限定する）
6. 攻撃的（強硬な攻めの態度）
7. 共感的（あわれに思う、感銘を受けるなど、感情的レベル）
8. 共感要求的（相手の共感を誘おうというはたらきかけ）
9. 感情調整的（興奮、怒りなど感情の揺れを静める）
10. 肯定的（相手を肯定的に評価しながらのはたらきかけ）
11. 否定的（相手を否定的に評価しながらのはたらきかけ）
12. 均衡回復的（Hと自身の間の有利・不利、強弱などの立場の不均衡を小さくする）

0.

< 1 2 > 話題・内容に対するSの確信

1. 弱（真、あるいは妥当だという確信はほとんどない）
2. 中
3. 強（真、あるいは妥当だという確信がある）

0.

< 1 3 > 話題・内容に対するSの評価・態度

1. 肯定的（良い、好ましい、快い、など）
2. 否定的（悪い、好ましくない、不快だ、など）

0.

< 1 4 > 明示性

- 1. 明示的
- 2. 非明示的（婉曲話法，言いさし，など）
- 0.

【述べられる命題の種類】

<15> 命題を含む発話かどうか

- 1. 命題を含んでいる → <16> <17>
- 2. 命題を含んでいない
- 0.

- <15> →
- <16> 命題内容の種類
 - 1. 客観的事実
 - 2. 主観的態度（感情，意志，意見，など）
 - 0.
 - <17> 命題の主題・主語
 - 1. S
 - 2. H
 - 3. SとH
 - 4. SとO
 - 5. HとO
 - 0.

【他の発話との関わり方】

- <1> →
- <18> 同調性
 - 1. 同調的（賛成する，従うなど，相手の向けてきた流れにのる）
 - 2. 非同調的（反対する，断るなど，流れに逆らう）
 - 0.

<19> 発話のうけつぎ方

- 1. 規則的（主張に対して相づちをうつ，など）

- 2. 変則的（相手の発話をそっちのけにして別の話をする，など）
- 0.
- < 2 0 > メタ言語性
 - 1. メタ言語的（言語形式，言語行動，談話のすすめ方などに言及するもの）
 - 0.
- < 2 1 > 談話構成上のはたらき
 - 1. あり（談話の開始・収束，話題転換などのはたらきを持つ）
 - 0.
- < 2 2 > プロセスの一部か
 - 1. プロセスの一部をなす
 - 0.

【発話の「場」を構成する要因】

- ▽参加者間の基本的な力関係
- ▽参加者間の基本的な親疎関係
- ▽媒体（電話など）
- ▽談話のジャンル
- ▽物理的場面
- ▽心理的場面

各項目の選択肢に含まれている「0.」は，分析対象となる発話が他の選択肢には該当しない場合，あるいはその項目に関する特徴づけが妥当でない場合（注3参照）にチェックされる。上記の諸項目は，特定の発話の特徴づけ作業において必ずしもすべてが意味を持つ必要はない。かえって，チェックが有意義となる項目の分布の仕方も，特徴を見る一つの観点になると考えられる。

選択肢の内容は項目一覧に示したが，幾つかのものについては，以下に簡単に説明を補う。

< 1 > 発話のきっかけ：発話の誘発要因に関するもので，選択肢のうち

「1.」と「2.」はSの自発性、「3.」～「6.」は非言語的文脈、「7.」～「11.」は言語的文脈に対する反応ということになる。言語的文脈とは、誰かのことばに依っての発話という意味だが、誰のことばに対してSがどのような聞き手として応えるかで選択肢を分けてある。「11. S自身の発話」とは、自分の言ったことを訂正したり、失言をその場で詫びたりするような場合である。

<2>発話を誘発したこととS, Hの利害との関係：選択肢の定義がやや曖昧だが、現時点ではSあるいはHにとってプラスなことかマイナスなことかといった程度に大まかに規定しておく。

<5>SとHの力関係の顕在化, <7>SとHの親疎関係の顕在化：SとHの基本的な関係は、ひとまとまりの談話の中で上下や親疎がそう急激に変化するものではない。ここで問題にするのは、発話ごとの関係のあらわれの有無であって、命令や冗談のように上下・親疎関係を特徴の一つとして持つようなはたらきが現れるか、その他言語形式などでそれらの関係を表示しているか、などのチェックを目的とする。「上下関係」「親疎関係」は、いずれも前述の南（1987 a）における種類分けの内容をすべて含むものとする。ただし、両者の関係は話題の選び方や言い方の調子など、様々なところで表現される上、基本的関係の設定にもまた困難な点が少なくない。これらの項目は、必要な視点と認められたものの、選択肢など記述方式の詳しい検討は、まだ今後の課題である。

<6>SとHの力関係への影響, <8>SとHの親疎関係への影響：これらは、その発話によって両者の力関係や親疎関係が変化する、あるいは上下が逆転するような場合を見るための項目である。たとえば、AとBが対等な立場で話をしている際に、Bに影響力を持つ人物がAと親しいことがAのある発話によって明らかになり、以後Aが優位な立場に立って話が進められるようになったとする。その場合の転換のきっかけとなった発話がこれにあたる。（注4）

<10>行為的機能：発話のはたらきを最も端的に問う項目である。この項

目での大分類が中核となり、次の「<11>Hへのはたらきかけの姿勢」をはじめとする他の項目とのクロスによって、徐々に発話の機能が特定化されてくる、と考えることもできる。選択肢の「5. 注目表示」は、認識を表わす間投的なことばや相づちの類が主となる。「6. 関係づくり、儀礼」には、挨拶やお詫び、感謝、「オ出カケデスカ」のようないわゆる phatic communion、それに談話のきりあげやしめくくりの部分の決まり文句的な発話などが含まれる。「7. 宣言」は、実際にはあまりないかもしれないが、従来の発話行為研究でよく言及された船の命名宣言や、野球の「アウト」という判定のようなものである。何の権限もない話し手が勝手に何かを宣言するのではなく、それが述べられることによって事態が決定されるような効力を持つ発話行為的機能を指す。

<11>Hへのはたらきかけの姿勢：行為的機能を果たす際の姿勢である。たとえば、「コノ本ハ安イデスヨ」という、「<10>行為的機能」では陳述に分類される発話を考えると、それによって相手に買わせようというのならば「1. 操作的」、単なる情報提供なら「2. 教示・伝達の」、内容がいいかどうかを聞かれてそれに答えずにまぎらすための発話なら「3. 非教示的」というように、場合によって異なる姿勢を持ち得る。

「10. 肯定的」「11. 否定的」というのは、聞き手に対する評価であって、たとえば「花子ニソナコトヲ言ッタノカ」という発話に、よくぞ言ってやったという調子と、そんなひどいことを言って、という調子の、どちらを込めるかという区別である。これは、「7. 共感的」よりも客観的な評価である。また、肯定・否定の評価が向けられる対象が聞き手か、あるいは発話の内容かという点で、「<13>話題・内容に対するSの評価・態度」とも区別される。

「12. 均衡回復的」とは、たとえばAとBが話をしていて、Aが恐縮したりへりくだったりしてみせる、あるいはお礼やお世辞を述べてBをもちあげた時（すなわち、「<6>SとHの力関係への影響」の「2. Hを上にする／Sを下にする」にあたる発話をした時）に、Bがそれを打ち消すような「ト

ンデモアリマセン」「イヤ、アナタコソ」の類の発話を返したとする。そのBの発話のような、一時的な立場不均衡を調整するはたらきを持つものが、これにあたる。

<18>同調性：先行する発話が要求や主張のように一定の方向性や流れを持つ性格のものであった場合、それに同調するか逆らうかの区別である。ただ、次の「<19>発話のうけつぎ方」にも言えることだが、同調する、あるいはうけつぎ対象を、「先行する発話」以上にどのように規定したらよいかという問題がある。たとえば、A、B、Cの三人が話していたとする。Aの「明日ノ会合、休モウカナ」ということばに、Bが「イヤ、行クベキダ」と言い、Cが「ソウヨ」と言ったとする。Cの発話は、Bの発話には同調的だが、Aの発話には非同調的である。このように、参加者が三人以上で意見が分れた場合など、対象の特定の仕方が複雑になる。直前の発話と規定することもできるが、実際の談話では、対象となる発話の後にコメントなり幾つかの発話がはさまってから同調・非同調の色合いを持った発話が出てくともある。「発話時に文脈において主となっている方向性」とでもすべきであろうか。

<19>発話のうけつぎ方：相手からののはたらきかけに対して、受けの反応を返している発話かどうかという観点。「<18>同調性」は相手の出方に従うか逆らうかで区別がなされるが、こちらは肯否に拘らず、十分な反応をすれば規則的、無視して自分のはたらきかけをするなど、いわば「やりとりのマナー」に反するものは変則的とする。この項目は、「<1>発話のきっかけ」における言語的文脈への対応と重複するようにも見えるが、うけつぎべき先行発話の存在がありながらそれをうけつぎない場合のようなネガティブな側面を捨てる役割を持っている。また、前言の訂正や取り消しなどは、「<1>発話のきっかけ」では先行する発話への反応にあたるであろうが、「先行発話のうけつぎ」という形になるとは限らない。

【発話の「場」を構成する要因】の諸項目：今回のような動詞の分析からは、この部分についての有効なポイントは殆ど得られない。今後実際の談話

資料にあたって、不備な点は補充し、さらにそれを使って分析を行なって妥当性を検討するという作業の積み重ねが、他のどの部分にも増して必要とされる。このグループに含まれる項目は、限られた選択肢の中から選ぶというより、あてはまる内容を記述形式で記すべきものが多い。また、＜1＞～＜22＞の特徴が個々の発話ごとに付与されるものであったのに対し、こちらの場合、項目によっては（物理的場面、媒体など）あるひとまとまりの談話についての値を設定すれば、その談話内ではほとんど変化は見られないと予測される。（注5）

5. 今後の課題

以上、発話の特徴づけを行なうための分類項目を提案した。しかし、今後に残された問題点は少なくない。

まず、項目によっては、選択肢の定義がまだ曖昧なものがある。各選択肢のカバーする範囲が明確にならなければ、チェックの基準も曖昧になってしまう。もっとも、元来分類には二つのタイプがあるように思われる。一つは、このグループに属するものはこれとこれ、という風に明確に境界線が引けるもの、そしてもう一つは、分類上典型的（理想的）なモデルのまわりに、それに類似したものが様々な位置関係を保ちながら分布しており、大づかみなグループ分けは可能だが、かといってグループ間に確固とした仕切りをするのは実体をゆがめることになるようなものである。発話の分類は、後者のタイプと考えられる。完全に明確な境界線が引ける場合は、おそらくかなり限られるであろう。しかしながら、分類基準の精密化はまちがいなく必要であり、今後実例分析との行きつ戻りつを繰り返しながら、検討を続けていかなければならない。

次に、分類項目、特に発話の「場」の要因をめぐる項目の充実が大きな課題である。発話の「場」とは、談話をとり囲んでいる静的な環境では決してない。場面・状況のあり方が発話の持つ意味やはたらきを規定し、また一つ一つの発話によって「場」も微妙に変化し得る。そのように両者がダイナ

ミックに相互作用し合っているとすれば、「場」の特徴づけもまた、発話の記述を行なう上で不可欠な要素である。今回は分析資料の性質上、発話の中に含まれるはたらきに集中する形になったが、今後は「場」についての情報を得ることに力を入れて、ポイントとなる要因を抽出していきたい。

複数の機能を同時に担う発話の処理も、問題である。たとえば、AとBが話していて、そばに話には加わっていないCがいるとする。Aの問いに対してBが「僕ハヨク知ラナイケド、ソノ件ナラC君ガ詳シインジャナイカナ」と、Cにも聞こえるように言ったとする。このBの発話は、Aへの答え（ある意味での情報提供）であると同時に、Cへの「聞かせ」による会話への参加の誘い、あるいは間接的な要求（「君カラ教エテアゲテクレ」）にもなり得る。こうした「聞かせ」の機能をどのように記述すべきか。複数の選択肢を同時にチェックすると、いろいろな意味で混乱を招きやすいので、機能の多重性というチェック項目を設けるのも一案であろう。しかし、「聞かせ」に関するものを機能の多重性として扱い始めると、参加者が三人以上いる談話では、かなりの数の発話が潜在的にそういった性格を示すと予測される。たとえば、D、E、F、Gの四人が話していたとする。DがEに「来週、オ引越シデスッテネ」と言った場合、それはEへの問いかけ（確認）であると同時に、「Eサン、来週オ引越シナサルンデスッテ」という他の二人への話題提供にもなり得る。その証拠に、話しかけられたEが答えるより先にFやGが「アラ、本当?」「マア、ドチラへ?」などの発話をする場合も少なくない。ただ、その種のものをどこまで拾うか、発話者の内にある意図をどこまで探るかは判断が難しい。これも、実際に分析を行ないながら、できるだけ現実的な処理の仕方を見出していくべきであろう。

最後に、今後必要とされる発話分類の枠組みの満たすべき要件として、以下の点をもう一度確認しておきたい。

●発話を形成する諸要因をとりこんだ多角的な分類項目を備えていること

発話は、様々な要因の総合体として成り立っている。発話の種類によって、どの要因が特徴的かも異なる。このような諸要因を、分類項目とし

てキメ細かく網羅する必要がある。

●特徴の記述に到達するような分類であること

発話分類の目的は、「標本づくり」ではない。すなわち、対象をグループ分けし、名づけを行なうことではない。最終的にある発話の分類上の位置が特定化された時には、同時にその発話の担うはたらきや特徴が明らかにされているような、記述の道具としても有効な分類を目指すべきである。

●個別言語を超えた一般的な性格を持つ枠組みであること

対照研究の基礎づくりにもそのまま応用できるよう、客観性、普遍性を備えた視点を基盤に持っていること。どのような言語の発話でも扱い得るような枠組みであることが重要である。

<注1> move の概念に関しては、他に Coulthard (1977), Owen (1983), 津田 (1989) を参照されたい。

<注2> 分析に用いた動詞・連語は以下の通り。

哀願する、挨拶する、相づちをうつ、悪態をつく、あざける、あてこする、あてずっぽうを言う、謝る、言い返す、言いかえる、言いさす、言いのがれる、言いはる、言いまちがえる、言いよどむ、言い渡す、意見を言う、いさめる、悼む、いばる、戒める、嫌味を言う、依頼する、引用する、受け流す、嘘をつく、打ち明ける、打ち消す、訴える、促す、売りこむ、演説する、遠慮する、おあいそを言う、おうむがえしをする、お悔やみを言う、教える、おだてる、脅かす、折り合う、折れる、音読する、確認する、数える、仮定する、からかう、感謝する、聞きとがめる、疑念を示す、却下する、供述する、強調する、共鳴する、許可する、許可を求める、拒否する、きりあげる、禁じる、くいさがる、苦情を言う、口答えする、口火をきる、口まねをする、口をはさむ、ぐちを言う、くっつかかる、くり返す、けしかける、結論する、謙遜する、抗議する、公言する、肯定する、抗弁する、(質問に) 答える、ことづける、ことばじりをとらえる、ことばをにごす、断る、ごまかす、探りを入れる、誘う、賛成する、叱る、示唆す

る、自賛する、指示する、支持する、自嘲する、質問する、指摘する、自慢する、しめくくる、自問する、祝福する、主張する、述懐する、証言する、承諾する、冗談を言う、承認する、証明する、知らせる、審判する、尋問する、推薦する、勧める、誓約する、説教する（小言を言う）、説得する、説明する、宣言する、（刑などを）宣告する、宣伝する、相談する、代弁する、打診する、断言する、談判する、注意をひく、忠告する、中傷する、調停する、告げ口する、つけ加える、（伝言を）伝える、提案する、定義する、訂正する、伝達する、問い返す、独語する、唱える、どなりこむ、取り消す、慰める、嘆く、なだめる、任命する、ねぎらう、ねだる、述べる、暴露する、励ます、発表する、話をあわせる、話をそらす、破門する、反論する、卑下する、否定する、非難する、皮肉を言う、否認する、批判する、批評する、表明する、復唱する、侮辱する、へつらう、弁解する、弁護する、（呼ばれて）返事をする、報告する、保証する、ほめる、水をむける、認める、命令する、申し入れる、申し出をする、黙殺する、物語る、約束する、（謝罪に対して）許す、要約する、予言する、呼びかける、弱音をほく、論破する、悪口を言う

<注3>分析における分類項目の適用には、ある程度の条件がつく場合がある。たとえば、「<1>発話のきっかけ」で自発的と特徴づけた（「1.」または「2.」をチェックした）発話に関して「<2>発話を誘発したこととS、Hの利害との関係」を云々することは意味をなさない。ある選択肢が選ばれた場合のみ他のある項目の検討が妥当になる場合は、該当する選択肢と検討されるべき項目をリストの中に矢印で示した。また、その検討の有無が他の項目でのチェック結果に左右される項目は、下位的なものとして少し右に下げている。

<注4>「<6>SとHの力関係への影響」「<8>SとHの親疎関係への影響」の項目は、杉戸清樹氏の御指摘による。

<注5>その際の「ひとまとまりの談話」にあたる単位の認定の仕方は、未だ摸索段階である。南（1972）の仮定的単位「談話」、および南（1987b）で述べられた談話の単位認定の手がかりを参考にしながら、談話資料の検討を通して考えていきたい。

<参考文献>

- Austin, J. L. (1962) How to Do Things with Words, New York : Oxford Univ. Press (坂本百大訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店)
- Coulthard, R. M. (1977) An Introduction to Discourse Analysis, London : Longman
- Hymes, D. (1972) "Models of the Interaction of Language and Social Life". In Gumperz & Hymes (eds.), Directions in Sociolinguistics, New York : Holt, Reinhart & Winston
- 金田一春彦・池田弥三郎編 (1988) 『学研国語大辞典』 第二版 学習研究社
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1) 一対話資料による研究一』 国研報告18 秀英出版
- (1964) 『分類語彙表』 国研資料集 6 秀英出版
- 南不二男 (1972) 「日常会話の構造 一とくにその単位について一」 『言語』 Vol. 1, No. 2
- (1987 a) 『敬語』 岩波新書
- (1987 b) 「談話行動論」 『談話行動の諸相 座談資料の分析』 国研報告92 三省堂
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について 一単位としての move と分析の観点一」 『日本語学』 9-11
- 野元菊雄 (1987) 『日本語教育映画基礎編 総合文型表』 日本シネセル株式会社
- 大野晋・浜西正人 (1981) 『角川類語新辞典』 角川書店
- Owen, M. (1983) Apologies and Remedial Interchanges :A Study of Language Use in Social Interaction, The Hague : Mouton
- Searle, J. R. (1969) Speech Acts : An essay in the philosophy of language, London : Cambridge Univ. Press
- (1975) "A Classification of Illocutionary Acts" Language in Society 5
- 杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動 一「注釈」という視点一」 『日本語学』 2-7

—— (1989) 「言語行動についてのきまりことば」 『日本語学』 8-2

津田 葵 (1989) 「社会言語学」 柴谷方良・大津由紀雄・津田葵 『英語学大系第6
巻 英語学の関連分野』 大修館書店

Wierzbicka, A. (1985) "A Semantic Metalanguage for a Cross-Cultural Comparison
of Speech Acts and Speech Genres", Language in Society 14

—— (1987) English Speech Act Verbs : A Semantic Dictionary, Sydney:
Academic Press

山梨正明 (1986) 『新英文法選書12 発話行為』 大修館書店